Funky Goods in 秋葉原

パソコンと人間との最前線

キーボードにこだわる

＜その２＞

波多 利朗

前回紹介しきれなかったキーボードがまだまだたくさんあるので、今回は「キーボード」の続きである。

小型キーボード

IBM純正のキーボードもいいが、占有する面積がばかにならないので、じゃまに感じることもある。そこでここでは、狭い机の上にも置けるような小型のキーボードを紹介する。

①台湾製コンパクト・キーボード

写真１は、US PCキーボードとコンパチブルな、台湾製コンパクトキーボードである。 キーの数は81個で、メーカー名は不明。大きさは、縦15.5cm×横31cmと、非常にコンパクトである。秋葉原のぷらっとホームにて6500円で購入した。

テンキー部分は当然ないが(注１)、[NumLock]キーで、キーの右半分をテンキー化することが可能である。また、[PageUp] [PageDown] [Home] [End] [Ins] [Del]キーは独立しておらず、兼用キーなので、ファンクションキー(Fn)を押す必要がある。

②DATALUX社製Space-Saverキーボード

写真２は、アメリカ、ヴァージニアにあるDATALUX社の「Space-Saverキーボード」というものである。省スペースというだけあって、とにかく小さい。外形寸法は、横27.5cm×縦16.5cmしかない。小さいが、キーはちゃんと100個付いており、非常に使いやすい。

通常、小型のキーボードは、キーの数が少ないため[PageUp] [PageDown] [Home] [End] [Ins] [Del]などは兼用キーとなっている場合が多いが、このキーボードは独立したキーとなっている。

横幅は、ちょうどノートパソコンのキーボード程度しかない。テンキーとカーソルキーおよびファンクションキーは、キーボード上部に置かれている。そして、これらのキーを押しやすくするため、キーボード上面は湾曲しており、向こう側にせり上がっている(**写真３**)。

キーを押した時のクリック音はないが、キータッチは比較的重いほうなので、安っぽさはない。[Enter]キーは、押しやすいように他のキーよりも１cmほど高くなっている。

使用してみて、[\]と[Esc]キーの位置がなじめなかったが、それ以外は一般的なキーボードと同等の操作性であった。とくに、[Ctrl]キーが[A]キーの隣りにあるのは非常に使いやすい。

このキーボードは、IBM PC/ATのほかにPC/XTにも使用することが可能だ。この場合は、キーボード上面のカバーを取り外して、内部のジャンパピンを設定することになる。

また、キーボード出荷時に、キーボードコネクタの形状および対応言語の指定ができる。キーボードコネクタは、５PIN DINタイプのXT/AT用と、６PIN MINI-DINタイプのPS/2用、およびRJ11タイプ(電話のモジュラーコネクタのような形状)から選択できる。対応言語

注１)テンキー部分は当然ないが……
別売のテンキーパッドも用意されている。これを付けたら、小型じゃなくなってしまうが。

注２)QWERTY配列
クワーティ配列と読む。タイプライタなどで使用されている英字キー配列のこと。キーボード上でQWERTYの順にキーが並んでいることから、こう呼ばれている。最もよく見かけるキー配列である。

注３)DVORAK配列
ドヴォラック配列と読む。アメリカの Auguste Dvorakという人が1936年に考案したキー配列で、使用頻度の高い文字を打ちやすい指に割り付けた配列となっている。
ANSIの第二水準となっている。

写真１　台湾製のコンパクトキーボード

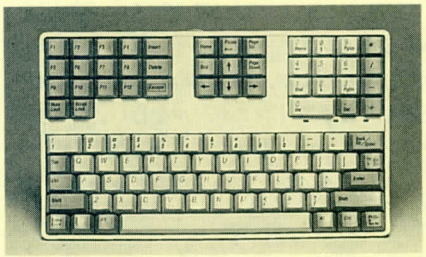
写真２　DATALUX社製Space-Saverキーボード

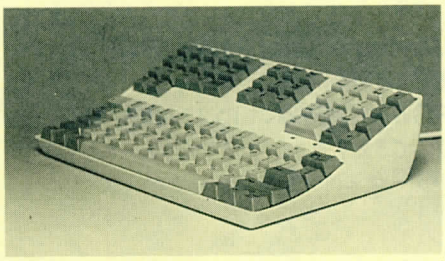
写真３　DATALUX社製Space-Saverキーボード(側面)

は、USのほかに、UK、French、German、Italian、Danish、Swedish、Spanishなどがあり、なかなか国際的である。

今回、このキーボードは、個人輸入によって入手した。参考までに、下記にDATALUX社の連絡先を示しておく。

DATALUX Corporation 155 Aviation Drive
Winchester,Va.22602
Tel：703-662-1500　Fax：703-662-1682

1994年3月時点での価格は、98.00ドルであった。

オムニキーボード(OmniKey 101)

写真4は、アメリカNorthgate社が発売する、オムニキーボードである。IBM PC以外のパソコンにも接続でき、キー配列も通常のQWERTY配列(注2)のほかに、DVORAK配列(注3)に変更することが可能である。秋葉原のクオーレストにて、1万4800円で購入した。

外観は通常の101キーボードと似ているが、サイズはIBM純正のUS ATキーボードとほぼ同じで、若干大きめである。重さは2.3kgで、持ってみると結構重い。

キータッチはかなり堅めで、クリック感のあるタイプのものだ。つくりはしっかりとしており、かなりの酷使に耐えそうである。キーを押したときのクリック音はかなり大きく、どちらかというと騒がしい。

このキーボードは、さまざまな設定を行うことが可能である。キートップの部分的なカスタマイズもできるようになっており、そのためのキートップ引き抜き器とスペアのキートップ(CtrlとCapsLockのふたつ)が、付属品として添付されている(**写真5**)。

キーボード上面左上のOmniKey101のロゴを記入したプレートはヒンジにより開くようになっており、その下に各種設定を行うためのディップスイッチとオプションセレクトボタン(機能設定用ボタン)が格納されている(**写真6**)。ディップスイッチの1～3は、キーボードを接続するホストコンピュータの種類を選択するために使われており、通常のIBM互換機だけではなく、Amigaなどにも接続することができる。

ディップスイッチの7を変更することにより、キー配列をQWERTY配列からDVORAK配列にすることが可能である。その際にキートップも変更する必要があるが、キートップは各列ごとに微妙に形状が異なっているため、別売のDVORAK用のキートップセットを購入する必要がある。

ディップスイッチの5は、[Ctrl] [Alt] [CapsLock]キーの相互入れ替えの設定となっている。これをON側に設定することにより、右側の[Ctrl]と[Alt]の入れ替えを行うとともに、左側の[Ctrl]を[CapsLock]の位置に、[CapsLock]を[Alt]の位置に、[Alt]を[Ctrl]の位置に、それぞれ入れ替えることができる。

このとき、右側の[Ctrl]と[Alt]はキートップの形状が同一のため、付属のキートップ引き抜き器でキートップを取り外して相互に入れ替える。また、左側の[Ctrl]と[CapsLock]は、それぞれ形状が異なるため、入れ替えた場合に利用するスペアのキートップが用意されているので、これを用いる。

以上のような設定は、ディップスイッチで行うほかにユーティリティプログラムを使用しても行うことが可能である。このユーティリティプログラムは、OU.EXEという名前で、CompuServeのNorthgateのフォーラムからダウンロードできる(アーカイブ名称は「KBUTIL.EXE」である)。

このユーティリティプログラムを利用することにより、キー配列の選択や[Ctrl]キーなどの位置の変更、リピートレートの変更などを行うことができる。さらに、このようにして設定を行った結果をファイルに格納しておき、そのファイル名をパラメータとしてOU.EXEを起動することによりキーボードの状態をファイルに格納された設定に変更することが可能である。これは、複数の人間でマシンを共有したり、利用するプログラムの種類に応じてキーボードの設定を変更したりする際に便利な機能である。

全体として、非常に使い勝手よくつくられている。とくに、通常のDVORAK配列に加えて、右手・左手のみで操作するためのキー配列のオプションが選択できたり、Stickyオプション(注4)を指定できるなど、ハンデ

Funky Goods in 秋葉原

注4)Stickyオプション
OmniKeyでは、Shift、Ctrl、Altの各キーについて、Stickyオプションが設定できる。Stickyオプションとは、キーを押して離したあとでも、そのキーを押している状態が維持される機能である。たとえば、CtrlキーとAキーとを同時に押すような場合、Stickyオプションに設定しておくと、Ctrlキーを押して離したあとも、Ctrlキーが押されている状態が維持され、Aキーが押されてあとで、Ctrlキーが解除される。
この設定にしておけば、2つのキーを同時に押せないような場合でも、連続してキーを押すことによって、同時に押した時と同じ結果を得ることができる。両手が使えないなどのハンディを負った人には、便利な機能である。

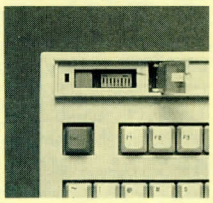
写真6　ディップスイッチとオプションセレクトボタン

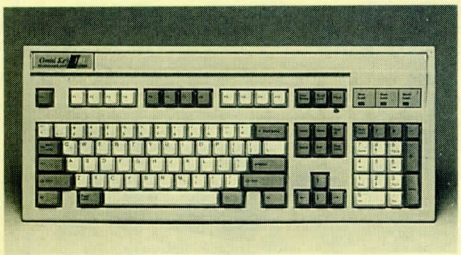
写真4　オムニキーボード(OmniKey 101)

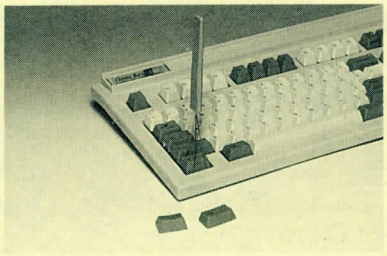
写真5　キートップ引き抜き器とスペアのキートップ

写真7　ERGONOMIC KEYBOARD KB-7000

ィキャップのある人たちへの細かい配慮が感じられる。

エルゴノミック・キーボード

最近では人間工学にもとづいたエルゴノミックキーボードと呼ばれているものをよくみかけるようになった。これらは、かなり異様な形をしたものが多い。

①ERGONOMIC KEYBOARD KB-7000

写真7は、台湾製のエルゴ・キーボードである。秋葉原のDOS/Vパラダイス(注5)にて9800円で購入した。キーの数は102個である。キーボード裏面の銘板によると、メーカーはCLEVO Co.という会社のようである。

エルゴ・キーボードとしては、比較的普通のキーボードに近い形状である。キータッチは台湾製でよく見られるクリック感のあるタイプで、多少カチャカチャとした感じがあるが、安っぽいわけではない。普通のキーボードを、真ん中からV字型に折り曲げた格好をしており、キーボードの中央にかなり大きな空間ができている。

テンキーが付いているので、キーボードの横幅は約53cmと、かなり大きい。IBM純正の5576-A01日本語キーボードの横幅が47cmであることを考えると、約6cmも大きいことになる。なお、キーボードコネクタは、5 PIN DINタイプのものであった。

②MARQUARDT社MiniErgoキーボード

写真8は、ニューヨークにあるMarquardt Switches Inc.が発売する「MiniErgo-MF2-Model 7053」である。

通常のキーボードと異なって、手前にかなり広いパームレスト部分があるため、奥行きのあるのが特徴である。キータッチは非常に変わっている。いわゆるクリック感があるタイプではないが、キーがサクサク入る感じがして、とてもよい。キーボードのガタつきもなく、高級感がある。

テンキーがないため、横幅は最大部分で45cmとコンパクトだ。キーボード背面には、おそらくテンキーを接続するための5 PIN DINコネクタが付いているが、マニュアルにはこのコネクタについての記述がまったくないので、どのようなキーパッドが接続できるのかは不明である(**写真9**)。テンキーパッドを付けなくても、Num-Lockキーを押せば、右ブロックのキーが数値キーとして使用できるようになっている。

難点としては、[Home][End][PageUp][PageDown]キーが独立しておらず、カーソルキーと兼用になっているところである。これらのキーを使用するには、ファンクションキー(Fn)を押さなければならない。

最近のキーボードとしては珍しく、キーボード本体は鉄板でできており、重量感がある。このキーボードは、まだ日本で取り扱っているショップがなかったので、筆者は個人輸入で購入した。メールオーダーの際の対応も非常によく、しっかりした会社だという印象を受けた。参考までに、下記にMarquardt Switches Inc.社の住所と電話番号を示しておく。

Marquardt Switches Inc.
2711 Route 20 East Cazenovia, New York 13035
Tel：315-655-8050 Fax：315-655-8042

1994年3月時点での価格は、179.00ドルであった。

③Kinesis社のERGONOMIC KEYBOARD

写真10は、本誌でも紹介されたアメリカKinesis社の超変態キーボードである。エルゴ・キーボードといえば、この製品にとどめをさすであろう。非常によくできており(注6)高級感もあるが、お値段も相当のものである。

詳細は紹介済みなので省略するが、かなりアクの強い製品であるといえるだろう(注7)。このキーボードも、個人輸入で購入した。購入先の住所、電話番号と、1994年3月現在での価格を、下記に示しておく。

Kinesis Corporation
915 118th Avenue S.E.
Bellevue, Washington 98005 U.S.A
Fax：206-455-9233 Tel：206-455-9220

キーボード本体	390ドル
フットペダル	25ドル(1個)

キーボードも凝るとなかなか奥が深いものだ。しかし、調子に乗って買いすぎると、置く場所がなくなってしまうので、注意しよう。

手は2本しかないのだからね。

注5)DOS/Vパラダイス
秋葉原にあるDOS/V関連機器専門店。筆者の知り合いの廃人どもは、「ドスパラ」とか「Vパラ」とかいう怪しげな短縮名称で呼んでいる。最新のマザーボード、ビデオカードなどをいち早く仕入れるので、スピードマニアの間では有名なショップとなっている。廃人巡礼の札所ともなっており、週末にはここで友人とバッタリ出会う、といったことが多い。ジャンク屋さんではないので、念のため。

注6)非常によくできており……
ちなみに、このキーボードのマニュアルによると、キースイッチの接点には金が使用されており、寿命は5000万回とのことである。筆者はひとつのキーを5000万回以上押してないので本当かどうかはわからないが、たぶん信用できる数値であろう。

注7)アクの強い製品であるといえるだろう
「アクが強い」ということは、いい方を変えれば「目を引く」ということである。実際、実物を見てみると、「ナンダコリャー」というような「変」な格好をしているので、ショップなどのショーウインドウに置いて、看板商品にするにはもってこいかもしれない。
余談だが、最近の秋葉原のDOS/V関連ショップでは、どこも似たような商品しか置いていないので、他店と差別化を図るのが困難な状況にある。ここはひとつ、「変な」物、「怪しい」商品ばかりを置いているショップの出現に、期待したいものである。

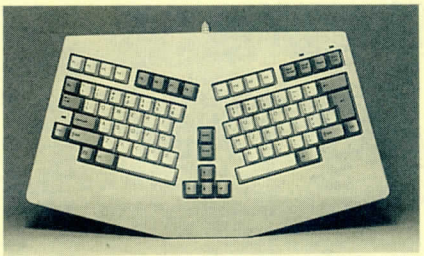
写真8 MARQUARDT社MiniErgoキーボード

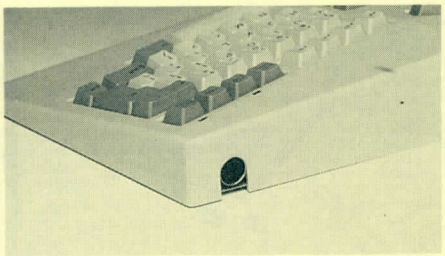
写真9 裏面のテンキーパッド用コネクタ

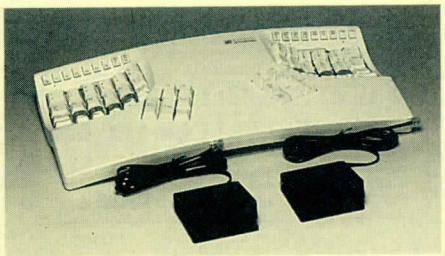
写真10 Kinesis社のERGONOMIC KEYBOARD